

ルリタテハは通常市街地で見ることが少ないチョウですが、西畑や松波町ではよく見かけます。それは幼虫がユリ科植物の葉っぱを食べるからで人家庭先に植栽されたホトトギスが発生源です。加古川市志方町のような里山が残る地域ではサルトリイバラ（別名サンキライ）やヤマユリなどから発生しています。私の郷里高知市ではサンキライの大きな葉っぱで包み込んだモチを芝モチとって、蒸して食べる習慣があり、子供の頃にはこの葉っぱをとり山に入り、するどいトゲに困惑したものです。

さてルリタテハですが、チョウになってからは樹液や果物の果汁、腐敗物などに好んで集まり、花を訪れるのは越冬後の観察例が多くなります。市街地では一体何をエサとしているのか心配になるのですが、西畑高砂公園のテニスコートなどでは毎年見かけます。もっともルリタテハはとても敏活に飛ぶため、



80415 加古川市志方町

チョウに関心のないひとには何か黒いチョウが飛んでいったとしかわかりません。でも、ルリタテハは路面や倒木などに羽を広げてとまることが好きなチョウで、その光景に出くわした人には濃紺の地色にみごとに美しく映えるルリ色の帯状模様が目に飛び込んできます。「えっ、こんなきれいなチョウが身近にいたのか」という瞬間です（好みによってはアカタテハ、あるいはヒオドシチョウの方がきれいだという人がいるかもしれませんが）。写真は加古川市志方町の里山、春の陽光が射しこむ林床で日光浴を楽しんでいるところです。人の気配にはとても鋭敏ですぐに飛

び逃げますが、スイスイヒラリと同じ場所にまた舞い戻ってきます。これは縄張り（テリトリー）を張るというタテハチョウ類に多くみられる面白い習性です。自分よりはるかに身体の大いヒヨドリを領域侵犯まかりならぬと追いかけるのを目にしたこともあります。木の葉や他のチョウ、トンボなど“動く物体”を激しく追飛する占有行動です。

アカタテハと違ってルリタテハには季節変異があり、秋に発生する個体がことさら美しくなります。ルリ色の帯模様がえもいわれぬ深みのある色調となり、翅形も秋型の方がより芸術性を増すように思うのは私だけでしょうか。1962年の写真は実に47年も前の私の所蔵標本ですが、きちんと管理をすれば美しい色彩がまだ楽しめます。1981年の秋型標本は西畑在住時、庭のホトトギスで自然発生した個体の記録標本です。タテハチョウの仲間は羽の表裏が著しく異なっているものが多く、総じて美しい翅表にくらべて裏は地味な褐色や黒っぽい樹肌に似た模様です。これは樹木や枯葉の上などに羽を閉じて静止した際みごとな保護色となって、その身を外敵から守ってくれる自然の妙です。ところで、このチョウの蛹には金色



June 29, 1962 高知市五台山 夏型

Oct.10,1981 高砂市西畑 秋型

裏面

ルリタテハ蛹

に輝く紋が見られます。ツマグロヒョウモンの蛹にもみごとな金色紋がありますが、異なる食草で育つこれらチョウの蛹に共通して見られるこの金色はいったいどういう植物成分から生まれるのでしょうか。沖縄や八重山諸島には蛹全体が金色に光り輝くオオゴマダラやヤエヤマイチモンジというチョウもいます。自然界の不思議は尽きることがありません。

ルリタテハも北海道から八重山諸島まで広く分布しますが、南西諸島では2002年の与那国島産標本に示すように、ルリ色帯がより内側に偏る亜種として区別されています。なお、この標本は前翅の白紋が青色となった、蝶仲間が“ルリイチモンジ”と呼んで珍重する台湾産に似た個体です。

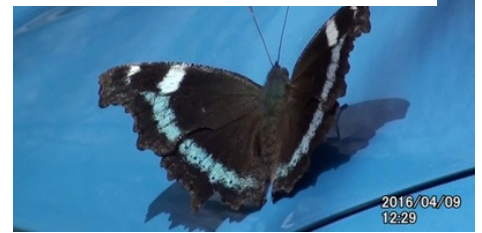
ルリタテハは崖の縁や岩の下面、浅い土の中などでの越冬観察例がありますが、越冬後の羽はほとんど傷んでいません。同じタテハチョウ科のヒオドシチョウが、羽化したばかりの新鮮個体ではすばらしく美しいのに、越冬後には見るも無残なボロボロの羽となって飛び出してくるのは好対照です。



Sep. 14, 2002 与那国島

Apr. 14, 2016 ルリタテハが産卵

4月9日に連れ帰ったお腹がでっぷりと大きなルリタテハをサルトリイバラ（サンキライ）の新葉と一緒にタッパウェア内に閉じ込め、スポーツドリンクを水で2倍に薄めた液を与えて様子を見ていたが、5日を経過した本日、実に60個という大量の産卵をしてきている。角度を変えると三段重ねという、サカハチチョウの産卵習性を思わせる離れ業がくっきりと観察できる。野外



では、このような集中産卵はありえないことだが、これらが有精卵かどうかは実は今の段階で確信は持てない。この母蝶は、車のボンネットのブルーに執着する行動を観察できたが、一気に気温が上がった野外へと放すと、元気よく飛び立っていった。

Apr. 20, 2016 ルリタテハが孵化

越冬ルリタテハのメスはうれしいことに交尾済みであった。産卵から一週間となる昨日（4月19日）、卵が鉛色に変化して孵化の兆候を示していたが、本日の16時過ぎにいっせいに孵化が始まっている。合計60個の産卵数で、そのうちの20個を友人に提供し、なお残る40個という飼育はルリタテハでは初めての多さだ。機会あるごとにサルトリイバラの新葉の調達準備をしてきているが、タッパウェアの容器内へと移動して

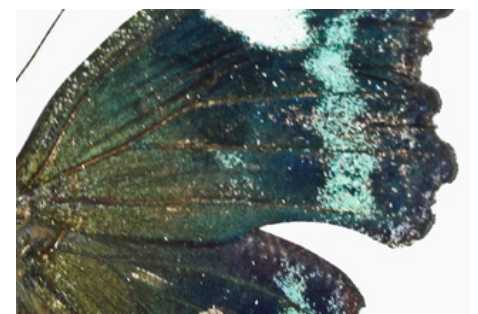
動く幼虫をそっと新葉へと移す作業には気を遣う。例えば日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）には孵化した幼虫は卵殻のほとんどを食べるという記載がみられるが、必ずしもすべての個体でそうとは限らないようだ。



動く幼虫をそっと新葉へと移す作業には気を遣う。例えば日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）には孵化した幼虫は卵殻のほとんどを食べるという記載がみられるが、必ずしもすべての個体でそうとは限らないようだ。

July 28, 2016 ルリタテハの珍しい変異体

5月の飼育羽化ルリタテハのなかに前翅に小さい青紋が発現した個体を確認し、乾燥標本として本日展翅板から外した。母チョウはApr. 9のギフチョウ観察会の日に車の周りで愛嬌を振りまってくれた越冬個体で、4月14日から約60卵を産み、20卵を友人にわけて残りの40卵から35



個体が成虫となり、多くは野外へと飛ばしたのだが、その中でこの変異はただの1頭だけで、筆者にとっては初めての体験。羽化は **May 23**, **Web** 検索で本変異個体の報告例をみることができるが、発現頻度は高くないと思われ、ズームアップ撮影記録も示しておく。